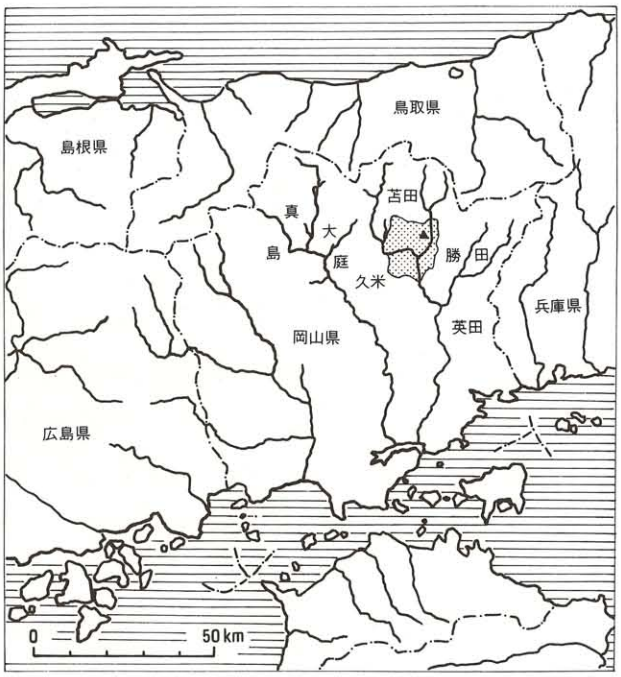
# 寺　田　古　墳

## 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第22集




1986

津山市教育委員会

# 序

寺田古墳は、水田構造改善事業中に突如発見された古墳です。発見者の適切な判断により迅速に当委員会に発見の報がもたらされ、その後の発掘調査により当地方の横穴式石室墳の一基本資料とすることができました。

ささやかではありますが、ここにその調査報告書が完成いたしました。多くの方々に御利用いただければ幸甚です。

調査にあたり種々御協力いただいた地権者則本要氏、工事者早瀬組の方々、有形、無形の御援助をいただいた地元関係者はじめ多くの方々に対し、紙面を借り衷心よりお礼申し上げます。

津山市教育委員会

教育長　福　島　祐　一

目　次


Ⅰ　発掘調査概要……1

Ⅱ　遺　構……3

Ⅲ　出土遺物

須恵器……7

金属器……9

玉　類……10

陶　棺……11

Ⅳ　概　括……12


挿　図


Fig. 1　寺田古墳位置図　縮尺1：25,000……2

Fig. 2　寺田古墳位置図　縮尺1：3,500……2

Fig. 3　寺田古墳全体図　縮尺1：80……4

Fig. 4　寺田古墳石室実測図(1)　縮尺1：40……5

Fig. 5　寺田古墳石室実測図(2)　縮尺1：40……6

Fig. 6　寺田古墳出土須恵器(1)　縮尺1：3……8

Fig. 7　寺田古墳出土須恵器(2)　縮尺1：3……9

Fig. 8　陶棺　縮尺1：20……10

Fig. 9　耳環、玉、鉄器　縮尺1：2……11


例　言

1．本書は、昭和60年4月2日から4月18日まで、津山市教育委員会が実施した岡山県津山市綾部字寺田に所在した寺田古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査ならびに報告書作成に要した諸経費は、津山市費をあてた。

3．発掘調査は、津山市教育委員会職員中山俊紀が担当し、本書の編集及び執筆は中山がおこなった。

4．遺構の実測にあたっては、安川豊史、飯田和江、戸田哲史の協力を得た。

5．古墳位置の海抜高は、約 190m で、実測図原点は任意である。

6．出土遺物、図面類は、津山市二宮の埋蔵文化財整理事務所に保管している。

# Ⅰ 発掘調査概要

寺田古墳の発掘調査は、工事中の不時発見を契機としたものである。

古墳の不時発見というのはやや奇妙にきこえるが、現地は狭小な谷斜面裾部で、古墳の墳丘は、古く削りとられており、旧状は石室上面が狭い水田となっていて、土地所有者すらその存在に気付いていなかった。

「石棺」発見の報が、工事者早瀬組池上氏から津山市の教育委員会に入ったのは昭和60年4月1日午前のことで、居合わせた筆者がとりあえず、現状確認のため現地に急行した。現地は、水田の構造改善事業が8割かたすんでおり、仕上げの作業に入りつつあった。その辺縁部で、重機進入のため削り残していた位置に、横穴式石室墳の側壁下段とみられる石材が法切り作業によって露呈し、内部に陶棺身部が浮きでていた。到着時には、大型ブルドーザーによって押し出されていた陶棺蓋破片がひろいあつめられ、陶棺内はスコップ、棒等で攪乱されていて、耳環、玉類がすでに掘りだされていた。

遺構の攪乱が、調査を困難にすることを説明、古墳周辺に重機を立ち入らせないことを確認し、既出土の遺物をもらいうけ、対応を協議するために一旦帰庁した。

古墳破壊状況、また工事日程からいっても、緊急に調査する必要があり、個人営の構造改善事業であることから、市の緊急調査費で対応することとして、岡山県教育委員会と電話連絡の上、翌4月2日から調査に着手することとし、同日午後、再び現地を訪れ、古墳範囲に線引きをおこなうとともに、石室部にシートをかけ発掘準備にはいった。

土地所有者同所則本要氏は、当日不在で、翌朝発掘調査についての了解を得、遺跡発見届を提出することを依頼、発掘調査に着手した。

発掘調査は、約2週間を要し、調査終了は同4月18日のことであった。

**古墳の位置**　寺田古墳は津山市綾部字寺田に位置し、加茂川右岸、国鉄因美線滝尾駅西方約500mの細く開析された丘陵部谷斜面に存在していた。

古墳からの兆望は、三方が山にとざされ、唯一東方のみ開けている。

同丘陵頂部には、古墳とおぼしき地形変化が認められるが、付近の遺跡分布調査はまだ実施されておらず、確認されている遺跡はない。

寺田古墳南東約 1.5kmに緑山古墳群および緑山製鉄製炭遺構群の存在した緑山丘陵が位置するが、両丘陵間には小谷があって、この部分を現在は国鉄因美線および県道津山加茂線が通過している。

※調査にあたっては、地元から、易文治、多胡勤、多胡宏允、多胡富佐子、津村暹の諸氏、岩尾寺御子息戸田哲史、雅生御兄弟に参加いただいた。また工事者早瀬組、谷名、池上、多胡の三氏には種々御協力いただいた。遺構実測については津山市教育委員会、安川豊史、飯田和江両氏に、遺物整理については日笠月子氏の援助を受けた。

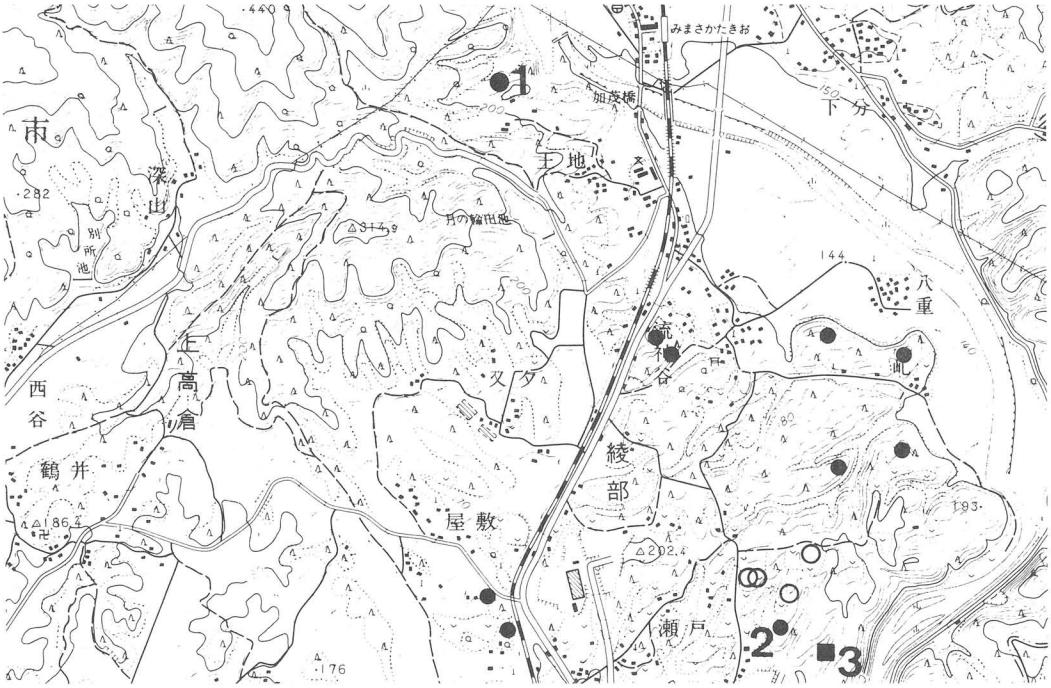



Fig. 1　寺田古墳位置図　縮尺１：25,000
１．寺田古墳　２．緑山Ａ１号墳　３．緑山製鉄遺構群

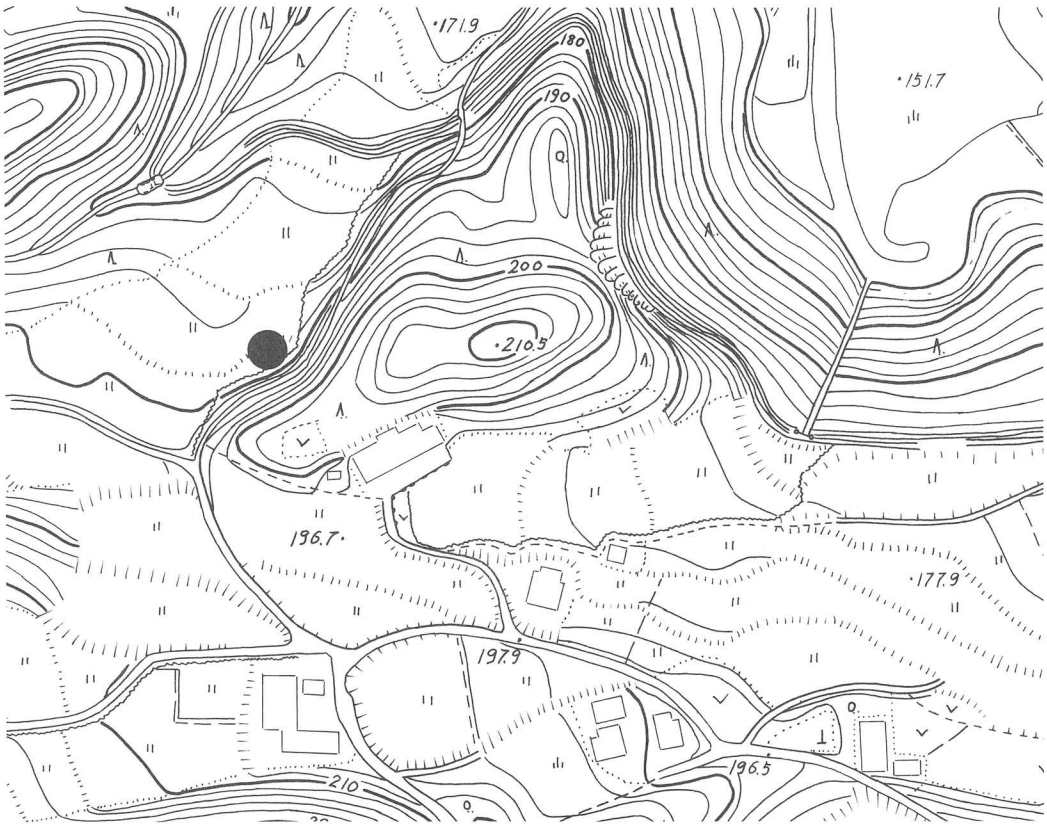



Fig. 2　寺田古墳位置図　縮尺１：3,500

# Ⅱ 遺　　構

石室主軸を北西方向に向けた横穴式石室墳で、発見時石室上部はすでに多くを削りとられていた。石室主軸東南方向に周溝状の幅80cm程の溝が一部残存しており、これから推測すると、本来直径10m程の円墳であったとみることができる。

羨道部の石材は、最下段のものに至るまでほとんど消失しており、全体構造については不明であるが、石材の散乱状況及びその据付け痕跡とみられるくぼみなどからみて、片袖式の石室であったと考えられる。石室推定全長は６ｍ、玄室長辺 3.5m、同幅最大 1.3m、最小１ｍ程が計測できる。なお、側壁の床面からの最大遺存部の高さは、約１ｍである。

ブルドーザーによる切削は、陶棺身部上面まで達していたが、その部分以下は、陶棺内が攪乱されていた以外、ほぼプライマリーな状態を保っていた。

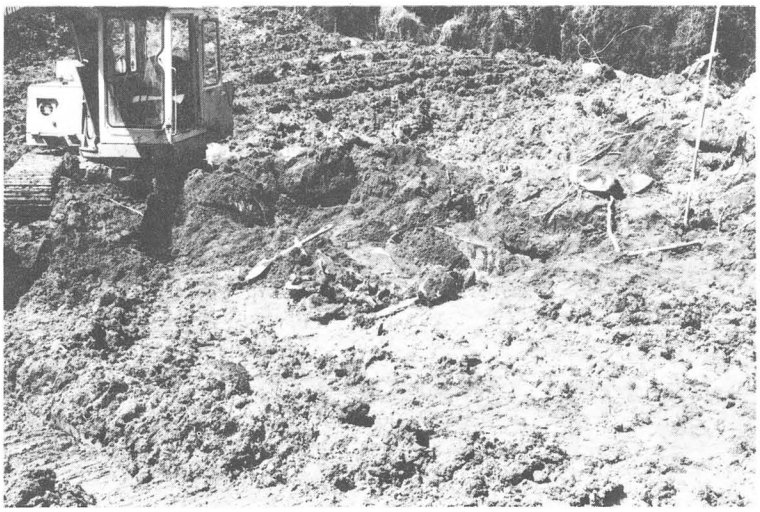
石室内に安置されていた陶棺は、亀甲型のもの１棺で、奥壁に一端を接し、石室主軸と斜の位置におかれていた。

石室の構築は、奥壁及び両側壁とも、最下段は同程度の大型の偏平な石材を横に立ておき、一石のみ遺存するその上に置かれた大型石材は、横積みされている。

陶棺以外の埋葬については明確ではないが、木棺による埋葬があったとみられ、床面に残された石材位置及び遺物の発見位置からみて、陶棺端から出口直刀出土部にかけ一棺、それに平行して一棺、陶棺出土位置に先行する一棺が存在していたことが考えられる。

遺物出土位置は、Fig.4,5のとおりであるが、陶棺内からは、耳環６個、勾玉７個、切子玉５個、管玉５個、臼玉22個、小玉32個が、奥壁側からほぼ集中して発見された。

陶棺側下には、多量の完形須恵器がおかれ、脚中に完形須恵器、脚下に須恵器片が挟っていて、陶棺安置以前に埋葬のあったことを推測させる。



寺田古墳発見時の状況

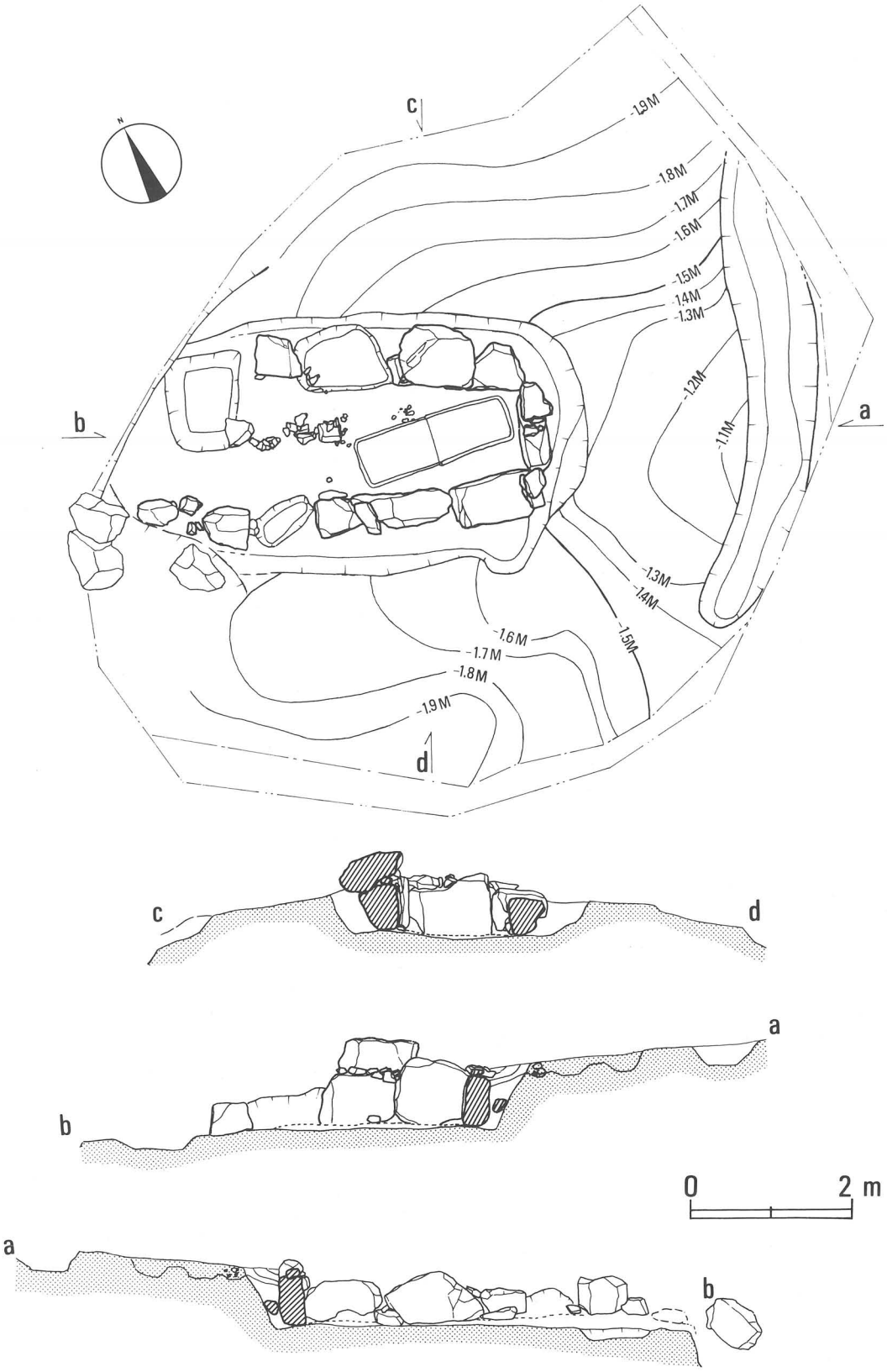



Fig. 3　寺田古墳全体図　縮尺１：80

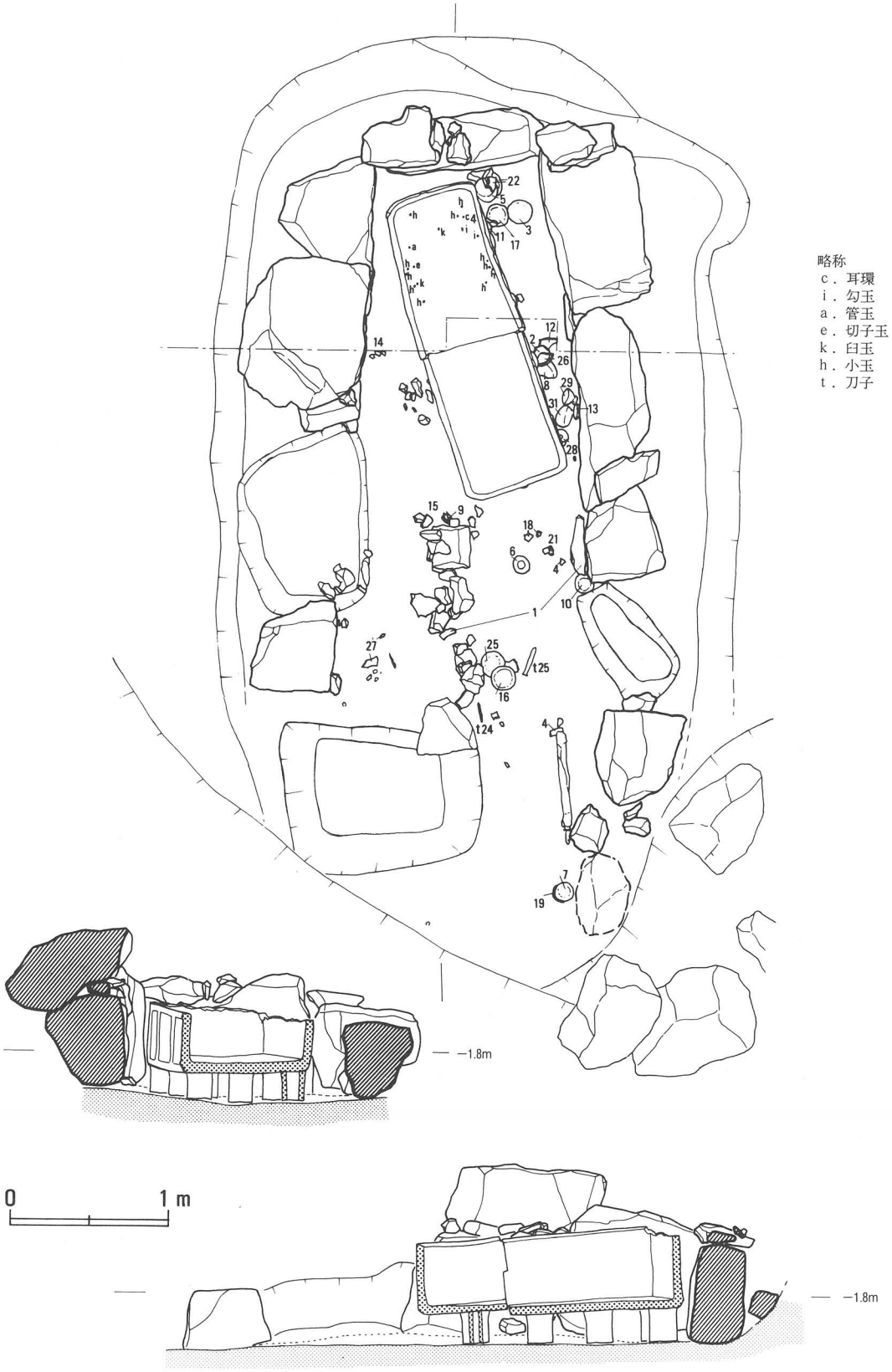



Fig. 4　寺田古墳石室実測図(1)　縮尺１：40

Fig. 5　寺田古墳石室実測図(2)　縮尺１：40

# Ⅲ 出土遺物

須恵器　Fig. 6，7

出土須恵器の器種別内訳は、蓋形土器15個体、蓋杯身15個体、高杯３個体、平瓶２個体、台付壺１個体計35個体である。このうち31個体についてFig. 6、7に図示した。

**蓋形土器**Fig. 6－1～14　器種、形態、法量からA、B、C、Dの四分類が可能なようにみられる。Aは１一点のみであるが、偏平つまみをもつもので、暗灰色を呈し焼成堅緻。天井部½ほどにヘラ削り痕を残す。内外面は概ヨコなで仕上げ、丁寧に調整されている。Bは２～９、11～13の11点あり、口径は13～14cm、器高４cm前後の類似した大きさをもつ一群のもので、天井、口縁部間の屈曲がなく丸味のある器形の特徴を共にし、端部はいずれも丸く閉じる。色調は、白褐色生焼状のもの(6)から暗灰色焼成堅緻なものまである。天井部は、11が回転ヘラ切り未調整である他½ほどにヘラ削り痕を残し、内外面ともヨコなでで仕上げられている。Cは、10一個体に限られているが、口部径12cm、器高 3.5cmと小ぶりのものである。形態も天井部と口縁部間に屈曲がある。天井部は、回転ヘラ切り未調整である。Dは14一点で、天井部は回転カキ目仕上げをしている。その他ヨコなで仕上げである。杯蓋としては類をみないものであり、本出土品中には例がないが、無頸壺の蓋である可能性がある。

**杯身**Fig. 6－15～27　いずれも蓋Bとセットをなす身と考えられ、Cに伴うとみられるものはない。立ち上りは短かく内傾し、端部は丸くとじる。底部は、½ほど丁寧にヘラ削り仕上げされているもの（18、15、21、25、20)、回転ヘラ切り未調整のもの（17、22、24）、その中間的な雑な仕上げのものがある。他内外面は、概ヨコなで仕上げである。

**高杯**Fig. 7－28～30　28、29は短脚の無蓋高杯である。28は灰白色を呈し、軟質の焼き上りのもので、29は暗灰色で焼成堅緻である。30は小破片からの復元図であるが、有蓋高杯脚部破片とみられ、一部透し孔痕跡が残されている。１の蓋とセットとなるものであろうか。

**平瓶**Fig. 7－31　全体に丸みの強い器形で、小さな口を有し、底部はヘラ削り仕上げされ、他は概ヨコなで仕上げである。灰色を呈し焼成堅緻。

これらの内、３、５、６、10、11、13、16、17、19、20、22、23、24、25、28、29、31、は完形品である。

**編年的位置**　主体を占る蓋杯の形態、口径及び調整の特徴から、それらは中村編年第Ⅱ型式第４段階ないしは第５段階[①]に類似するものと考えられる。28、29の短脚高杯及び31の平瓶もほぼ同様に考えられる。しかし、30とセットかと考えられる１の蓋は、これらのものに比べ諸点でやや古い特徴をもつものとみられ、10の「杯蓋」はやや新しい傾向を持つものあるいは異器種に属するものかとも考えられる。出土状況等からそのことを確認することがまったくできず、岡山県北で須恵器編年が進んでいない現在[②]、それらが型式の違いによるものか、同時期の所産

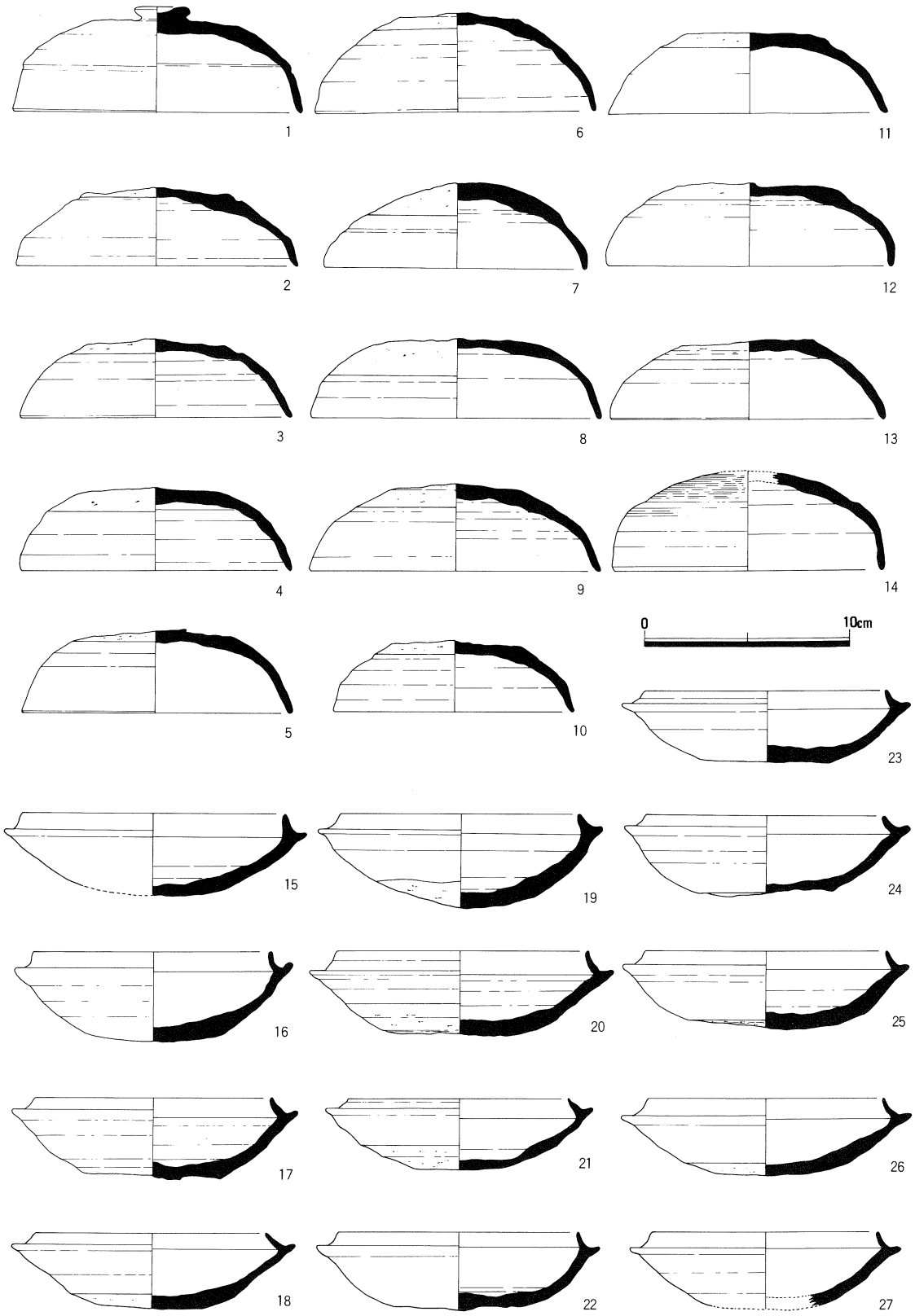



Fig. 6　寺田古墳出土須恵器(1)　縮尺１：３

のものであるかは、にわかには判断できない。

従って、寺田古墳使用時期に概6世紀末ないしは7世紀初頭という年代観を現在与えることが妥当だろう。

注

① 中村浩「陶邑」Ⅲ　大阪府文化財調査報告書第30輯　大阪府教育委員会　1980

② 美作地方の須恵器編年としては、村上幸雄、橋本惣司「糘山遺跡群」Ⅱ　久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告2　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980のなかで試みられた編年案が現在唯一のものである。この編年案の各期の特徴と寺田古墳出土須恵器蓋杯の製作上の特徴を対比してみると、量的問題を度外視すれば、それらは、糘山1期から3期にわたるものであるということになろう。ただし本墳でのそれぞれの出土状況は必ずしもそれと整合するものではなく、その使用という観点からみて、それらはほぼ同一時期に所属する一群の遺物と巨視的にみる以外にはないだろう。

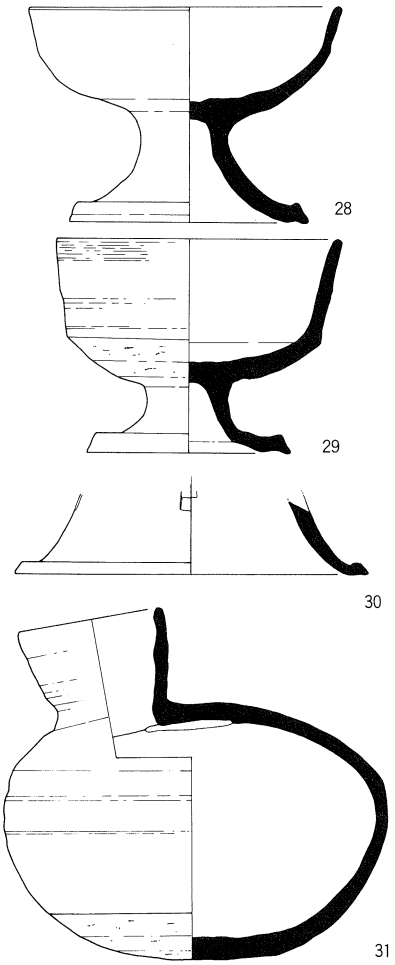



Fig. 7　寺田古墳出土須恵器(2)　縮尺1：3

## 金属器　Fig. 9

出土した金属器は、鉄製直刀1、同刀子4、不明鉄器1、耳環9個体である。直刀は、全長75cm、刃渡り65cmで刃部幅3cmを測かる。中子端近くに目釘穴を有す。押しつぶれているが、鍔がほぼ完形で遺存しており、鍔刃側に鞘端の留め金具とみられる帯状の金具が一部遺存している。25は束刃部端に束金具が遺存している。26は、用途不明の鉄器で、排土中からの発見品である。22、23は調査前陶棺内を攪乱した際出土したものとされ、棺内副葬品の可能性の強いものである。

耳環は、いずれも中実で銅胎に金箔を押したものである。最大は1で、長径 3.4cm短径3cmで、断面径9mmである。最小は7で、長径 2.7cm、短径 2.6cm、断面径7mmである。2、3、4、7、8、9の6点が陶棺内から出土したと考えられるものであるが、このうち調査で出土したものは4の一点のみである。1、5、6は調査中石室床面より出土したものである。

玉類 Fig. 9

玉類は、欠損品をふくめ71個体出土している。いずれも陶棺内より出土したもので、その大半は陶棺内東部に存在していたと考えられるものである。71個体のうち、調査前に取り上げられていたものは7個体、調査により原位置を確認できたもの19個体、その他は発見時の攪乱により原位置を正確に特定できないもの及び排土の水洗により発見されたものに分かれる。

玉種内訳は、匂玉7、管玉5、切子玉5、臼玉22、小玉32である。

匂玉は、材質から、1．碧玉製（Fig．9—10)、2．灰白色石材の大小二個体（Fig. 9—11、14)、3．黄褐色めのう（Fig. 9—12)、4．白色不透明のガラスかとみられる極めて脆弱なもの（Fig. 9—13）三個体、に区分される。

管玉5個体は、いずれも碧玉製で(Fig. 9—16、17)同形態、大小あって最大は長さ 2.1cm、径1cm、最小同 1.7cm、 0.5cmである。

切子玉はいずれも水晶製でほぼ同大である(Fig. 9—15)。

臼玉は、欠損品も含め22個体であるが、いずれも黒色系の同一石材とみられるもので、個体によって灰色を呈するものがある(Fig. 9—18)。

小玉は、匂玉4と同材と考えられる白色不透明のものが23個体存在し、いずれも径は8mm前後である（Fig. 9—19)。 他に透明ガラスが8個体あり（Fig. 9—20、21)、 濃・淡青色、青紫色を呈す。一点臼玉と同一石材とみられる黒色のものがある。いずれも径は5～6mmであるが、透明ガラス一個体は径1.1cmとやや大きい。

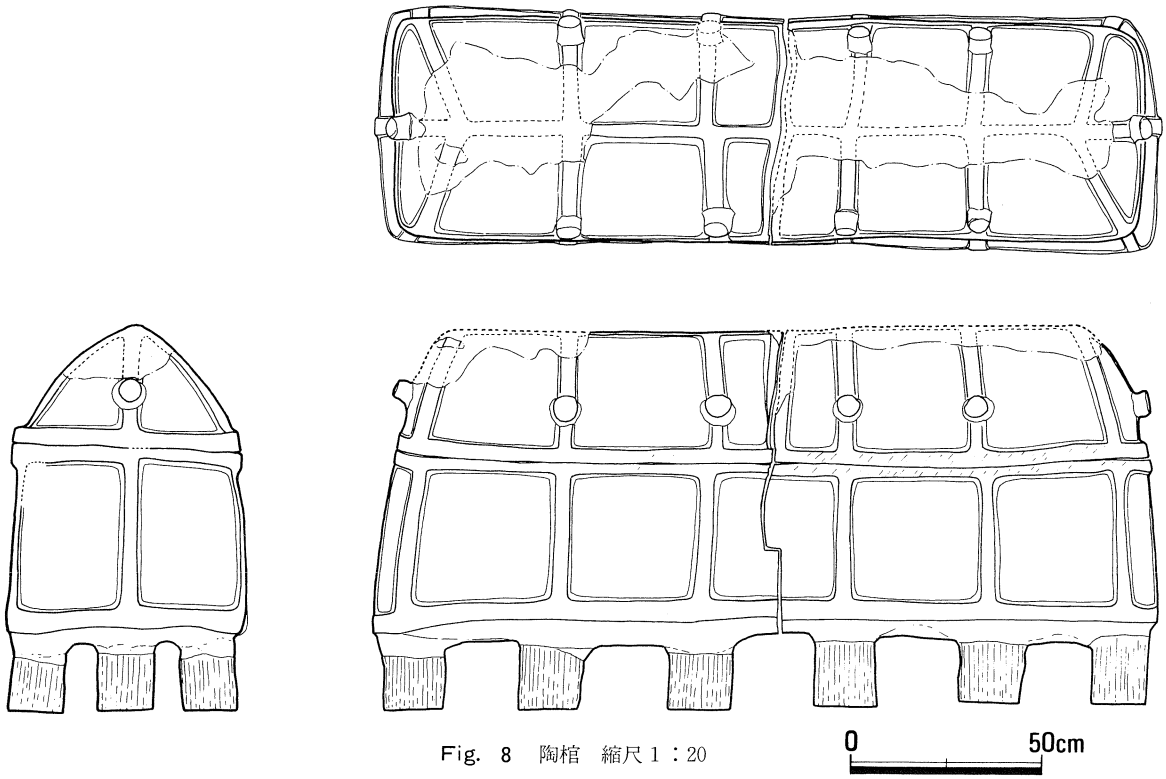



Fig. 8 陶棺 縮尺1：20

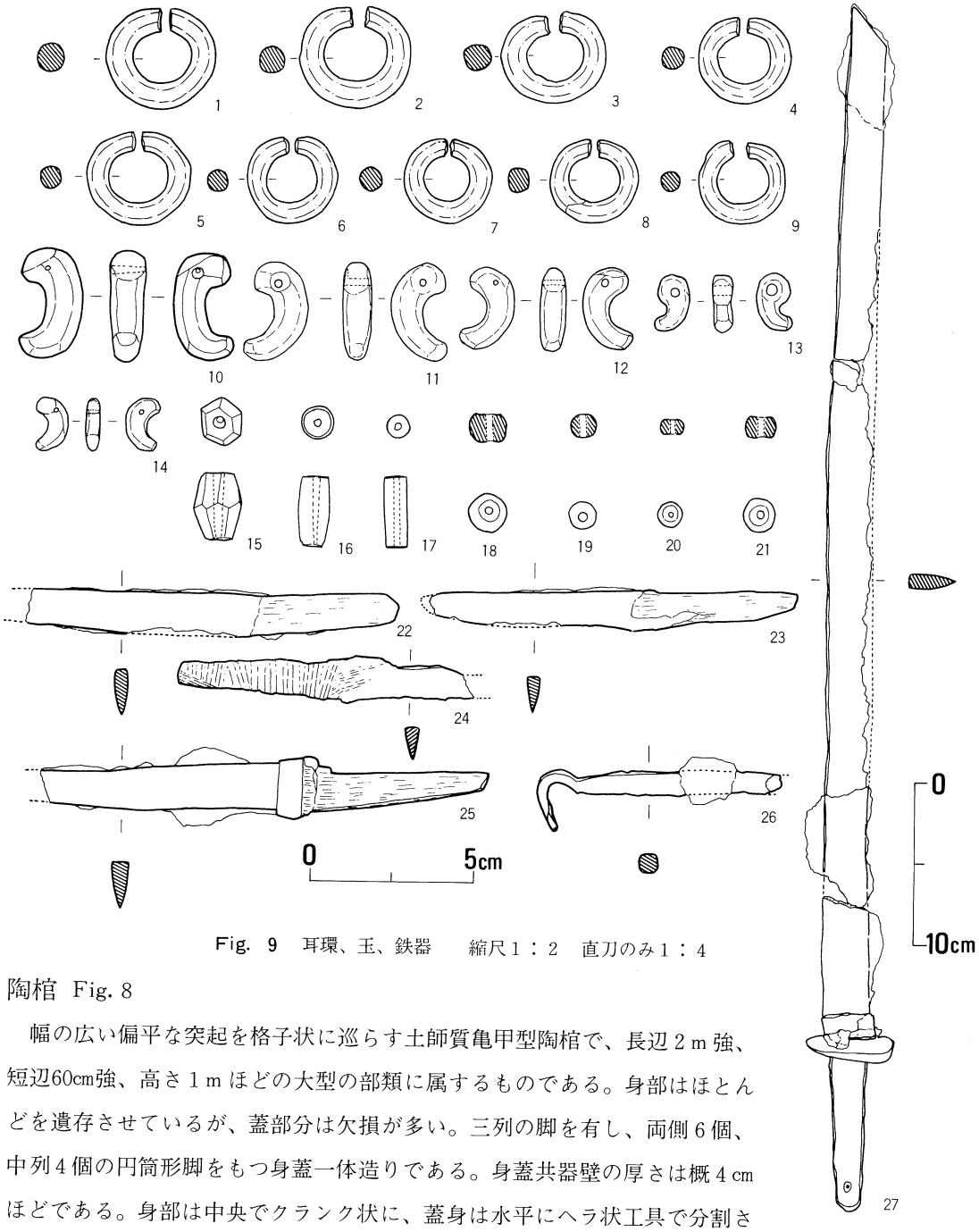



Fig. 9　耳環、玉、鉄器　　縮尺1：2　直刀のみ1：4

陶棺 Fig. 8

幅の広い偏平な突起を格子状に巡らす土師質亀甲型陶棺で、長辺2m強、短辺60cm強、高さ1mほどの大型の部類に属するものである。身部はほとんどを遺存させているが、蓋部分は欠損が多い。三列の脚を有し、両側6個、中列4個の円筒形脚をもつ身蓋一体造りである。身蓋共器壁の厚さは概4cmほどである。身部は中央でクランク状に、蓋身は水平にヘラ状工具で分割されている。蓋接合部は、重ね部と受け部に分かれる。その接合部の遺存面は少く、また、なで仕上げされていて、成形痕を残さない。身部、蓋部とも内外面丁寧になで仕上げされていて、10個存在する突起も差し込みでつけられているが、内外表面にはその痕跡をとどめていない。蓋部に通常残されている「封じ穴」も痕跡は認められない。特異なものとして、身部下部に乾燥用とみられる小孔が複数あけられている。

# Ⅳ 概　　括

構築及び使用時期

石室構築及びその使用時期幅については、出土須恵器の年代観によっておおよそは推測されるが、既述のように美作の須恵器編年については今だ基準となるものがなく、厳密なそれらは特定できない。

出土須恵器の細部の特徴については、出土量の多い蓋杯でみれば、天井部、底部の仕上げ方法に数種あり、製作時期の違いをそれぞれが示している可能性もあるが、器形、法量が均一化していることからみれば、いずれもほぼ同一時期に用いられたものと考えてよいだろう。ただ一点これらに比べ小形の蓋形土器が発見されており、これが同器種のものであるとすれば、異る製作時期のものとみられ、若干石室使用時期が下る可能性がある。いずれにしろ、これら須恵器の現状の年代観からすれば、本石室墳の構築時期は六世紀末葉、最終使用時期は、七世紀初頭までに納まるものであろう。

被葬者数

石室遺存部における確実な埋葬施設は、陶棺(1)のみであるが、遺物及び石材遺存状況からみて、陶棺に直列して羨道部側に一ないし二棺(2)、袖部に一棺(3)、陶棺安置前にその部分に一棺(4)木棺等が存在していたのではないかとみられる。

(4)についてはほとんど手がかりはないが、陶棺脚内に杯（Fig. 6—20）がすっぽりはまっていたこと、同脚まわりに多くの須恵器が存在していたこと、側壁部床に耳環がのこされていたことなどから推測したものである。

また、個々の施設も必ずしも一体埋葬とは限定できず、たとえば陶棺内からは耳環が6個体発見されており、一対一人に対応するとすれば、三体以上が陶棺内に葬むられていたことになる。

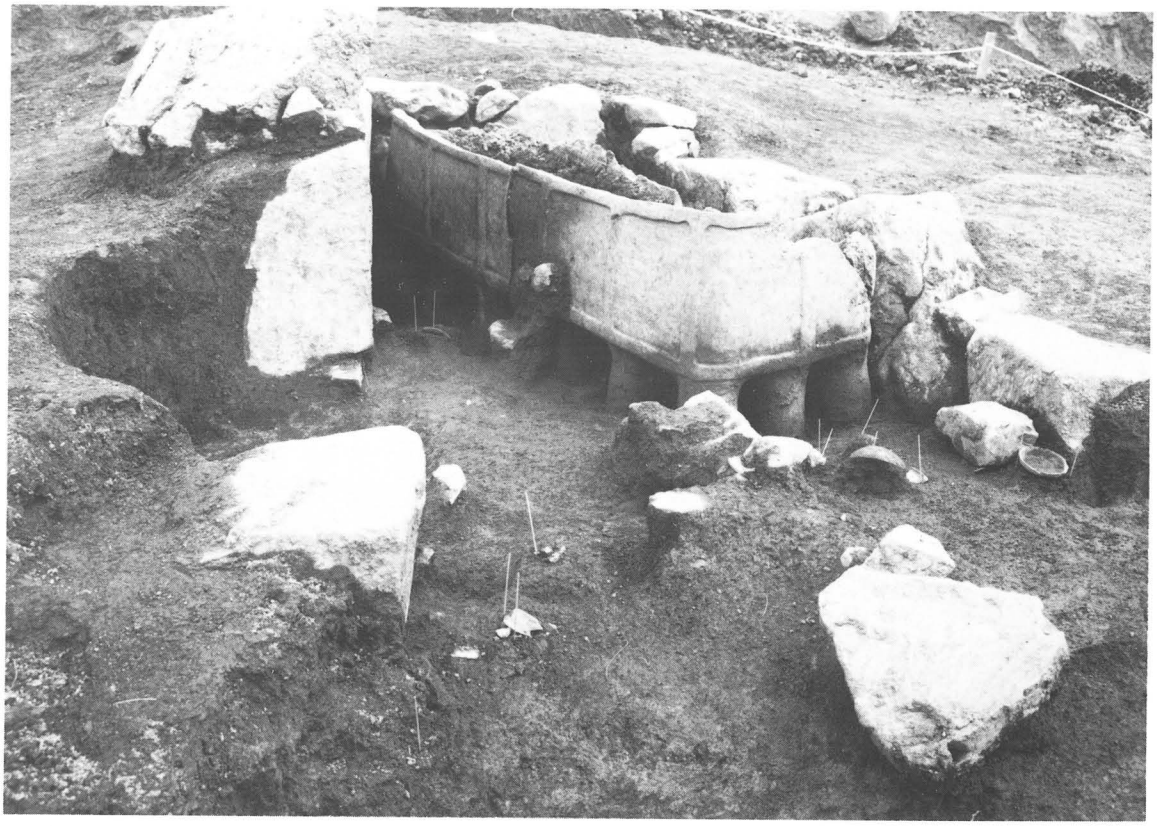
埋葬施設数、埋葬人数いずれも特定しがたいが、すくなくともこれら事実から、比較的限定された時期に、多人数が埋葬されていたことだけは推測してもよいだろう。

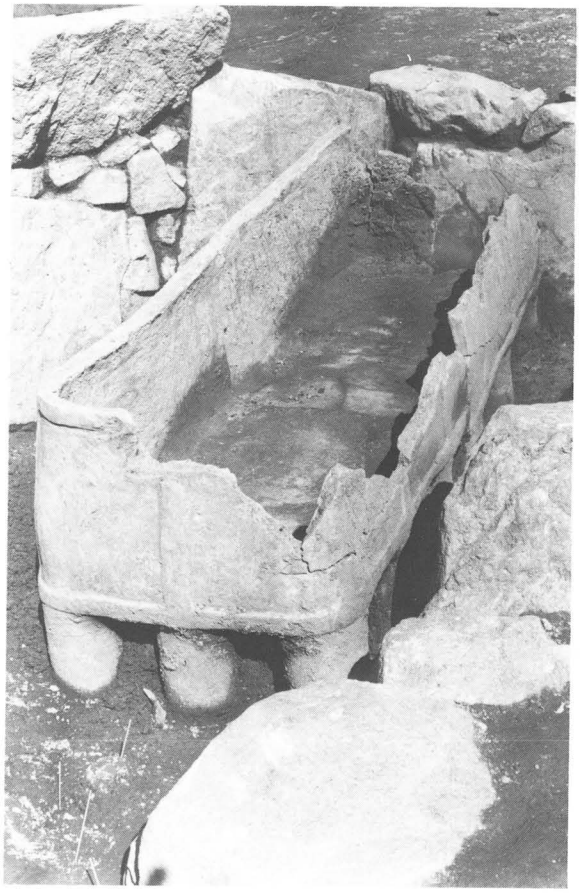
副葬品

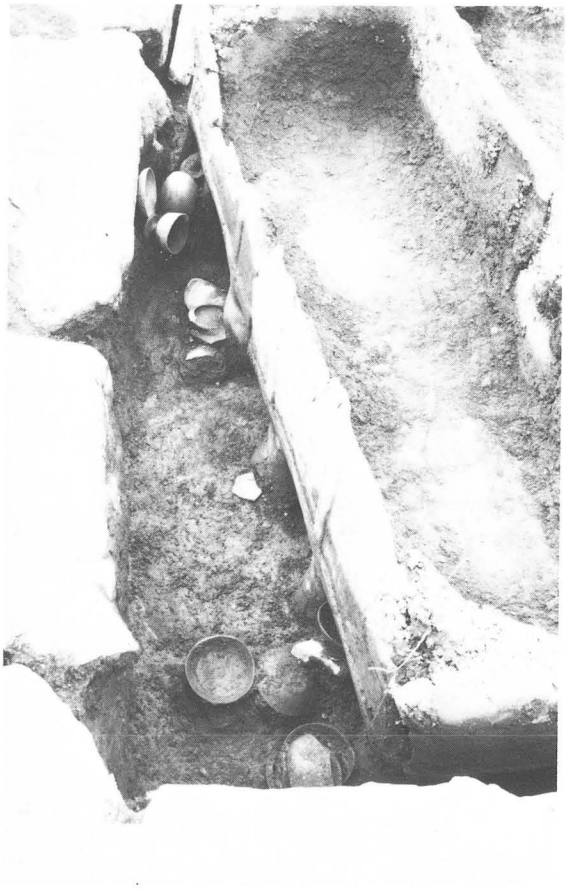
以上の前提で、各埋葬施設ごとの副葬品をあげると、(1)玉71個体以上、刀子2、耳環6、(2)直刀1、刀子2、(3)耳環1、(4)耳環1が最低存在していたとみられる。

その他、この時期の石室墳の副葬品として問題になる鉄滓等製鉄関連遺物は発見されていない。ただ鉄滓等は羨道部、閉塞部で発見される確率も高く、本墳ではその部分の遺存がなかった上、周溝も一部分確認したにすぎないので、本来存在しなかったのかどうかは不明である。

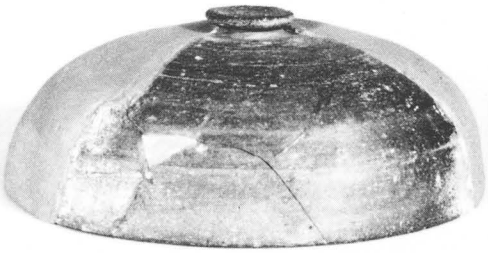
寺田古墳

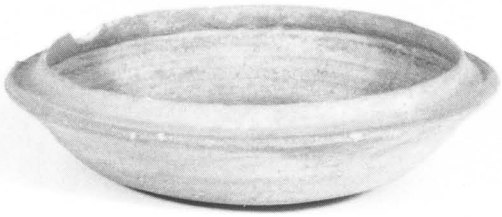


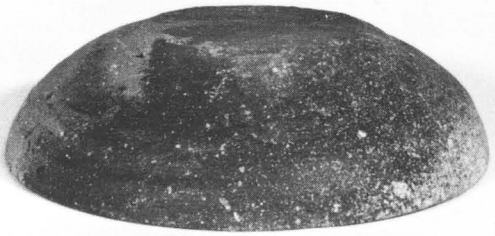


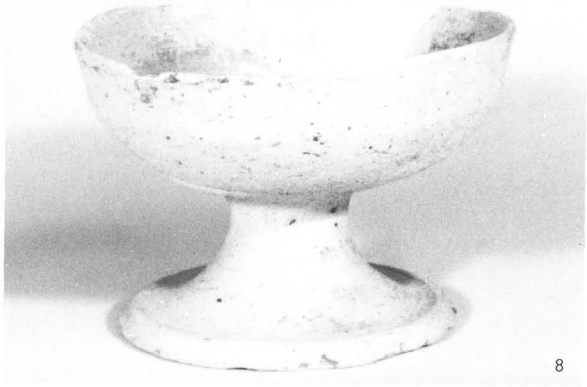


寺田古墳


1

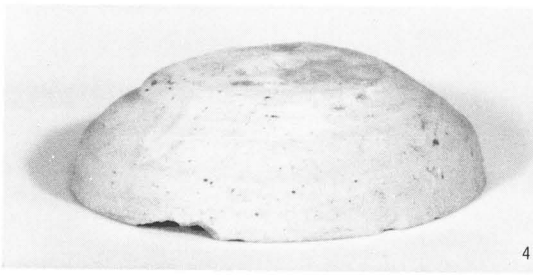

7


2


8

3

9


4

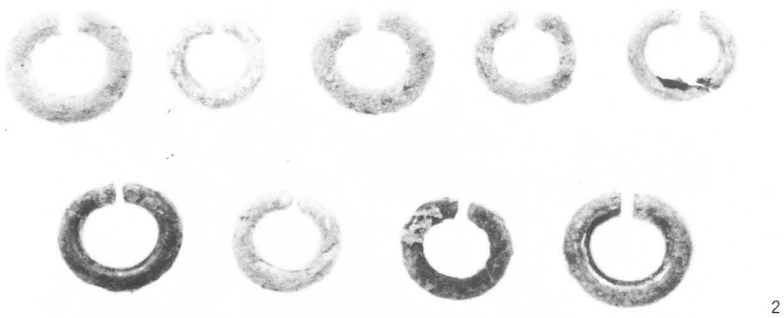
5

10

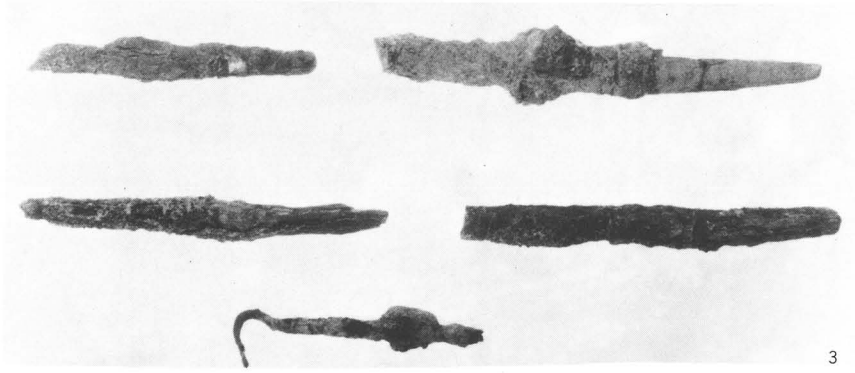
6

須恵器　1．蓋形土器（Fig. 6－1）　2．蓋形土器（Fig. 6－13）　3．蓋形土器（Fig. 6－11）　4．蓋形土器（Fig 6－10）
5．坏身（Fig. 6－17）　6．坏身（Fig 6－23）　7．坏身（Fig. 6－25）　8．高坏（Fig. 7－28）
9．高坏（Fig. 7－29）　10．平瓶（Fig. 7－31）

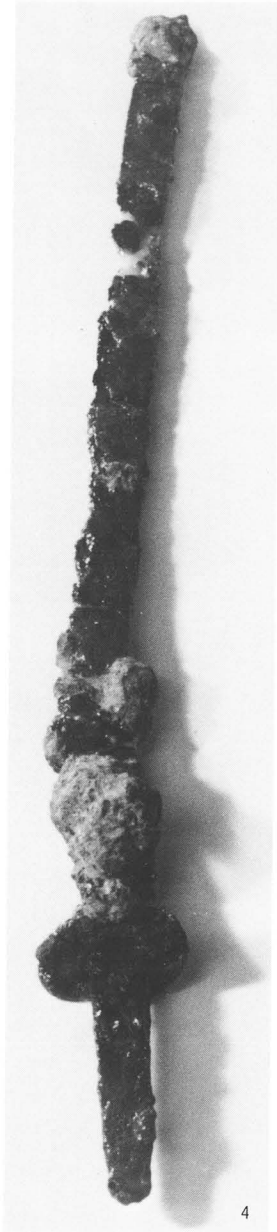
1



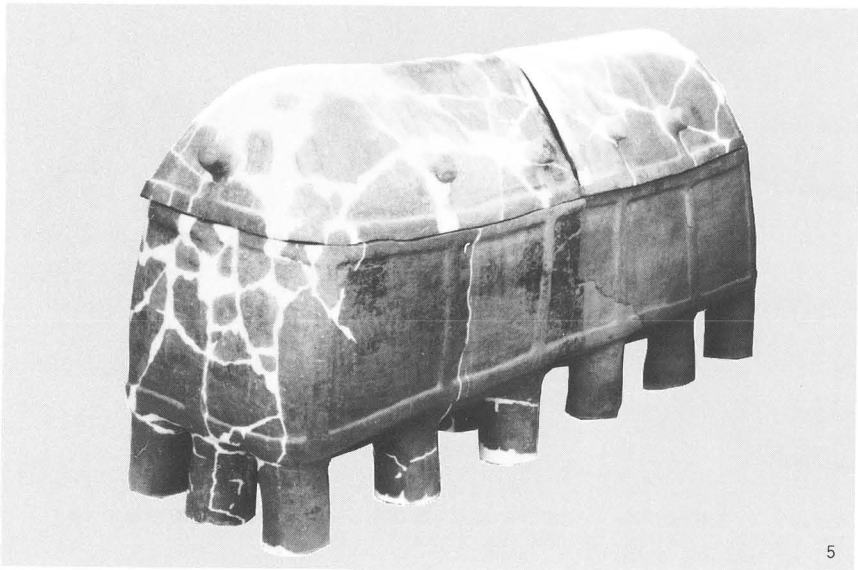
2



3



4



5

1．玉類（Fig. 9）
2．耳環（Fig. 9）
3．鉄器（Fig. 9）
4．直刀（Fig. 9）
5．陶棺（Fig. 8）

寺田古墳

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第二二集

津山市教育委員会


寺 田 古 墳

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第22集

1986年　3月31日

発　行　津山市教育委員会
津山市山北520
印　刷　有限会社　弘文社
津山市川崎168